

INTERNET

1996

WORLD

EXPOSITION

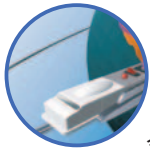
A WORLD'S FAIR FOR  
THE INFORMATION AGE




インターネットワールドエキスポ通信 ②  
スペシャル・インタビュー


**村井 純**

インターネットワールドエキスポ'96実行委員会 委員長  
慶応義塾大学 環境情報学部 助教授



「インターネットワールドエキスポ'96」の概要については、先月号でお知らせした。そして、来年1月1日の「開幕」を目指し、その具体像も明らかになってきた。先月号掲載したが、128Kの専用線を1年間無料で使えるという公募もすでに始まった。今月はこのエキスポの実行委員長を勤める慶応義塾大学の村井純助教授にエキスポの趣旨とどんなことがこの1年間で起るのかということについてお話をうかがった。インタビューア:本誌副編集長 中島由弘 


96年1月に開幕を目指し、「インターネットワールドエキスポ」がいよいよ本格的に稼働を始めたわけですが、このイベントはどのような背景で企画されたものなのでしょう?

**村井**  インターネットが急速に広がってきて、いろんな人がいろんな目的で使うようになってきて、その守備範囲の広がりにはものすごいものがあります。いままでは多くの問題をネットワークやコンピュータの専門家が作ってきたのですが、インターネットにいろんな分野の人が関心を持ってきたと同時に、社会ではインターネットをこう使いたいんだという目的が出てきています。いままでは目的の生成とその解決をコンピュータサイエンティストがやるということで閉じていて、自分たちの環境を自分たちが作るのだといったわけです。

とインターネットの関わりが進んでいたことから「タウンホール」という考えでやろうとっていたりしたのです。もちろん時期の問題もあって、1996年にできるかということも議論もあったのですが、規制の問題や政府の動き、国際的な動きなどが活発になってきていて、しかもいつのまにかインターネットをいろんなところでうまく使っている人も出てきたという総合的な状況から、1996年にターゲットを絞ろうと思ったわけです。

これは「タウンホール」でもなければ、「シティ」でもなくて、結局は「エキスポ(博覧会)」なんだらうということになったわけです。エキスポという言葉で結び付けたのは、やっぱり「エッフェル塔」のたえがあったからです。みんなで力を合わせて、インターネットの実験やプロモーションのできるインフラを世界に作ったとする

速なネットワークということですか?

**村井**  そうですね。いちばん大切なのはインフラでしょう。現在では日米の回線でも合計して12Mくらいしかないわけで、国内の回線でも普通は1.5Mくらいですよ。家庭に入るのは64Kだったり、普通は28.8Kのモデムだったりするわけです。

それが家庭に入る回線は1.5Mとか10Mとかいう時代になるだろうし、そのときに家庭にコンピュータネットワークがあるということでもビジネスがぜんぜん変わってくることもなります。こうしたことを促進するためにも、安心してお金のことを気にしないで使える回線も作らなければならないし、高速なバックボーンと家庭線という2つのいまないインフラストラクチャを用意しなければならないでしょう。それが今回の基本となるインフラなんです。このような少し未

来型のインフラを用意すること、そしてその上であらゆる分野の人がそ

## 「インターネットワールドエキスポ'96はインターネットを5年から10年の前倒しにする原動力。」

しかし、現在では目的意識は別のところにあるわけです。いろんな人が使うわけですから、その必要性、目的、それは社会のいろんな活動が舞台になったのです。経済もあれば、教育、医療、技術もそうです。そこでの要求というのはそれぞれ違うわけで、その解決はみんなでやらなければならないのです。しかもきちんと要求が定義されなければならないのです。

これをやるためには、技術の可能性、インターネットの可能性を多くの人に理解してもらわなければならないし、ある意味で体験してもらわなければならないし、コミュニティがそのための体制を作らなければ進まないわけです。

そのためには何をすればいいかということも1994年くらいから考えていて「インターネットシティ」という概念でやろうとか、アメリカでは政治とか政府、行政という分野


と、エキスポが終わった1年後に「さあ、イベントは終わりましたから片づけましょう」といってもやめられないものもあるわけです。つまり遺産として残るものです。つまりこれはある意味での「前倒し」なんです。ある理想のプロトタイプを作っておいて、それが現実になるというプロセスは早まると思います。このエキスポによってちょうど5年から10年前倒しになると考えています。

エッフェル塔は万博があったからそのまま残ったんだし、ファーストフードやファミリーレストランみたいなお店も万博を契機に作られて、そのときだけのつもりでやったのが、あまりにもうまくいって残るということもあるでしょう。そこで「エキスポ」という言い方になったんです。

「エキスポ」にのっての「エッフェル塔」は高

の問題に気がつき、理解して、挑戦するという1年を迎えること、これがインターネットワールドエキスポでやりたいことなんです。


「エキスポ」という看板は、インターネットに興味はもっていても、きっかけがないためにたまたま参加していない人たちが、いっしょに活動していくための非常に大きな求心力になりそうですね。

**村井**  「エキスポ」っていうのがあるならやってみようっていう人がいっぱいできれば、世界とかモデルとかを作っていけます。ネットワーク、もちろんテクノロジーは全般にそうですが、コミュニケーションの手段は1人で使っても意味がないし、2人で使ってもちょっとは意味がある、だけどみんなが使うとなんでもできてしまうわけで、インターネットはそこを狙うべきです。

家庭では使っているのか、子どもは使っているのか、ということが重要になります。いままでは会社や組織の活動ということしかターゲットになかったけど、それだけではだめです。小さいものから大きなものまで全部が関わって「デジタルインフラストラクチャがどうできるか」を考えることが重要です。

128Kの専用線が1年間無料で使えるという企画も、今回は残念ながら300回線しかとれなかったんですけど、衛星を使った30Mの通信の実験などもエキスポの後期には間に合うと思います。ケーブルテレビを使った高速な家庭のデータコネクションもできると思いますし、いくつかの実験的なサービスインも計画されています。

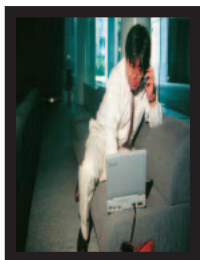
このエキスポの「パビリオン」とはどんな形をしているのですか？


村井  いまのインターネットでいえば、WWWのサーバーがパビリオンだというイメージとして近いでしょう。エキスポの中で起こってくるさまざまな新しい技術とか新しい人や組織は、1つのWWWから見るという形、そこで動いているのはインフラも新しいものを使っていて、速く動くとか、動画も見るとか、音も聞こえるとかということになります。世界や未来のインターネットを見ることが出来るWWWサーバーができました、というのがパビリオンです。

たとえば、VRMLの新しいインターフェイスを体験したいといった場合、多くの人が試してみることができればいいですけど、太い回線を前提としていることもあります。もちろん通常の商用インターネットからエキスポの催し物を見ることもできますが、普通の環境では見ることができないものもあります。そこでどこかにでかけて行って見ることができればいいわけですが、この場所

も分散にしたい。インターネットカフェだとか、ショールームだとか全国に用意してそれは45Mや6Mなどの高速なネットワークで接続したパブリックアクセスのポイントをできるだけ多くの場所に作るように計画しています。ですからそこに行けば見ることができます。つまり「幕張メッセ」に相当する環境は日本中にできるのかもしれませんが。

ではそのパビリオンではどんな催し物が企画されていますか？



村井  いろんな催し物を用意しています。コンサートを中継するだけならテレビと変わらないので、あまり面白くないですよ。たとえばライブスポットで音楽を演奏するというのは、みんながお酒を飲んでいて、夜で、都会で、お客さんの顔を見ながら音楽を決めて演奏するのもかもしれないけど、これがインターネットで世界中がつながると、昼の人もいるし、夜の人もいるし、朝の人もいるわけです。夏の人もいれば、冬の人もあります。そういう人が聞いている中でミュージシャンとのインタラクションはどうなるんだろうということ、インターネットライブハウスをやるようになっているミュージシャンもいるわけです。それから今度は世界中の人が作るようになっている人の意見を取り入れて、プロデュースしていこうという企画も持っている人もいます。


ノーベル賞の授賞式をインターネットで扱おうという人もいます。たとえばノーベル賞を授賞した人は大きな業績があるわけ

で、人類に対する莫大な蓄積があるわけです。こういうものと授賞式というセレモニーをどう融合したら人類にとってのイベントになるのかということです。ノーベル賞の受賞者の横顔を見た場合に、この人の書いた文学や業績とはどういうものなのか知りたいかもしれないです。それからその人の生い立ちを知りたいかもしれない。そして授賞式の瞬間を見たいと思うかもしれない。これらを一つのメディアでできるというのはいままではなかったわけで、そういった

形で新しいメディアとして考えて実験してみようという人たちもいます。そうしたことの断片がみんなの力ででき、おきなきっかけになればいいと思います。


そして企業ではなく個人で「ミニパビリオン」を作ってもらおうという企画もあります。それが128Kの専用線の公募です。この128Kの専用線に当選した人がどんな企画をやるのかすごく楽しみです。

1年間のエキスポが終わった後はどうなるのですか？

村井  1年経ったあとで、それを評価して、つぎの世界を作る際の基にならなければならぬわけです。そういった多角的な視点で評価されるというのは重要なことだと思います。その結果をもとに「エキスポでうまくいったんだから、こうすればうまくいく」というように世界全体が自信を持つことが重要だと思います。


実際にインターネット上のサービスを提供しようとする、いろんな規制、権利関係、業界内の調整などが発生して本格的なものなかなか実現できずにいる人もたくさんいると思います。しかし、それをエキスポという期間限定の実験という題目の下でみんな試せるというのは画期的ですね。



村井  規制があるからできない、だから規制緩和が必要なんだなんていいますが、それですむ問題ではありません。たとえば、いまのデジタル専用線は高いですよ。これは規制があるから高いと多くの人は思っているかもしれませんが、規制をとれば例えばいいかというそういう問題ではないんです。

規制を作っている省庁の人も含めて、いま何が起きているのか、これから何が起るのかを理解することが必要で、そのなかでルールが自然にできてくるわけです。このコミュニケーションができていないことは問題ではないのです。もちろん規制を壊すことが目的でもありません。われわれがいっしょに生きていく上でどういうルールが必要なのかということをお互いに考えるということが非常に重要なことなんです。これはインターネットワールドエキスポの大きな使命だと思います。

机の上の理論ではなく、社会の中で実際に試していくことが重要だということですね。

村井  そうです。それがみんなの幸せになるなら、そうしましょうという話になるわけです。つまり、よりよくするための規制なんですから。でもそれが本当にいいのかどうか分からないと緩和されません。つまりそのリスクが大きければ物事は動かないわけです。でも1年間の実験ということであれば、リスクを背負ってもいいということがあるわけです。やってみて危ないと思えば止めればいいし、うまくいくならその方向で発展すればいいわけです。

いろんな規制と合わないものもいっぱいできています。技術の革新によって、いままでの規制がうまく馴染まないと思っているのですから、新しい発展をする

ことに貢献することは大きな使命です。しかもエキスポをインターネットのグループで閉じるのではなく、いろんな人とやっていくというのは大きな意味があります。


すでにいろいろな視点をお持ちの方が実行委員会に集まって、議論も始まっていると思いますが、特に期待する分野や活動がありますか？

村井  すでにたくさんの人に集まっても



らってはいますが、強いというなら経済関係の話題は大きな意味をもっていると思います。そして政治とか教育とかですね。とくにこのあたりの分野に大きな影響があると思います。たとえばデジキャッシュなんて簡単にいってますが、電子貨幣がどう動くかなんていうのを考えるのは難しいし、理解もできません。そういうところで活動しなければならいんですけど、これらの問題についてはこれからつめなければならいんです。足回りもそうですね。建築業界の人とか最初からインターネット付きの住宅を作ったり、不動産関係の人が出てきたり……。


このエキスポは国際的な活動であるわけですが、他の国の準備状況はどうですか？

村井  日本の立ち上がりはかなり順調な方です。アジアでいえば、韓国なども政府レベルでかなり積極的ですが、準備がありますから1996年1月からはちょっと難しい

かもしれないですね。日本でもちょっと遅れ気味ではあります。だから一般のエキスポみたいに1月1日にテープカットがあって、そのときにすべてが完成しているというわけではなく、1年間かけて徐々にいろんなものが完成していくということになると思います。

韓国、シンガポールは政府レベルのサポートがあります。ヨーロッパはヨーロッパ全体として動いていて、30人くらいの実行委員が集まっています。アメリカはホワイトハウスをはじめとする政府機関と企業が中心となって動いています。アメリカ国内はすでに太いバックボーンがありますので、日本のように未来型のバックボーンを構成するところには魅力はないかもしれませんね。ですから、もっと奇抜なアイデアで勝負してくるでしょう。インフラ的にはアジアがいちばんの恩恵にあずかることができると思います。

開催は2か月後に迫っていますが、インターネットマガジンの読者の方もこれから参加のチャンスはありますか？

村井  もちろんです。日本でも1月から始まりつつ、インフラは国際回線の45Mなどは2月くらいから、そして年間を通じていろいろ始まります。いますぐは無理でも来年後半にはこれができるなんていう人は、いまからでも遅くないですから、ぜひ参加をして欲しいと思います。インターネットマガジンの読者の方もいまから企画と準備をしてぜひ参加して欲しいと思います。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)